東方紅魔混沌録～カオスぎる紅魔館の宴～

プレインズウォーカー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

紅魔館で混沌の宴のはじまりはじまり。

目　次

宴の準備 ―――――――――――――――― 1
1幕：三方よいは三歩（ぽう）よ～いスタートではない ―――― 3
2幕：受け取ったそれぞれの反応 ―――――――――― 6
3幕：相手は面倒・・・よし逆に利用させてもらおう ―――― 9
4幕：セーラー服と小さい豊穣の妖精と弾幕ごっこ（前半） ― 13
5幕：セーラー服と豊穣の妖精と弾幕ごっこ（後半1） ―――― 18
6幕：セーラー服と豊穣の妖精と弾幕ごっこ（後半2（コメイジこいし） ―――――――――――――――― 22
7幕：セーラー服と豊穣の妖精と弾幕ごっこ（後半3（弾幕突入（前） ―――――――――――――――― 25

宴の準備

コスプレ・・・これは衣装を着て、モチーフになっているものの立場になって思い切って楽しむものだ。
それは多くなればすごい事になり、同志を募ってこの場面を再現しよう!!
この踊りをみんなで一緒に楽しく踊りましょう!!
こういうのはありだぜはっはっは、意気投合したもの同士の楽趣味(たのしいしゅみあわせてらくしゅみ)と言ってもいい、良い行動とみんなにとって楽しいと思う行動は自然に伝わっていくものである、まさに伝わる蔦。

おおっとプリーストブラスターではなくて、そろそろ本編に・・・。

～紅魔館（レミリアの部屋）～
レミリア「退屈だわ・・・。」
パチュリー「退屈だって思うのなら、自分にとって利益になるものを見つけてみたらレミィ?」
レミリア「私にとっての利益って何よ、本が知識と宝の山といわんばかりのパチェには私の退屈の気持ちなんて分からないわよ。」
パチュリー「やれやれ・・・。
椅子に座って本を読んでいる私が言うことじゃないけど・・・椅子に座ったままメキメキと力がつく甘い話なんてないのよ。
レミィの退屈の気持ちは私には分からないわよ。
私はレミィじゃないんだから。」
レミリア「言うじゃない、パチェ。
そういうパチェも本を読む以外の趣味を持ったらどうなのよ?」
あ～いえばこういうわね、全く。
パチュリー「そんなに言うなら、紅魔館の宴と言うのを考えてみたら、レミィ?」
レミリア「宴?それって異変を起こせって言うの、パチェ?」

パチュリー「どこをどう考えればそうなるのよ、そんなことしたら霊夢と妖怪の大賢者様が黙っていないわよ？
親しい誰かを呼んでコスプレの宴を楽しむのもいいと思うわよ、私は。」
レミリア「コスプレ??パチェ、それって何よ？」
パチュリー「いろんな衣装を着たりして楽しむ、それがコスプレっていうものよ。」
レミリア「それよ!!パチェ、紅魔館の中でカオスぎる宴・・・面白いわ!!」
パチュリー「私が言い出したから責任感あるわね・・・。」
レミリア「パチェ、手伝ってくれるの～～!?」
パチュリー「手伝いじゃないけど・・・まあ、いいわ。
紅魔館のメンバーとアリスとレミィが招いた者だけが通るのは簡単でそうじゃないものが通るのは難しい結界を張るのは作ってあげるわ。
館の中めちゃくちゃにされたらたまったものじゃないから。
衣装は咲夜に任せればいいと思うわ。
私は着ないけど・・・。」
パチュリーの事だから自分の宝の山を荒らされるのが好まない事だとレミリアは思っていた、いかにもパチュリーらしいといえばパチュリーらしい。
パチュリー「それで誰を宴に参加させるの、レミィ？　伝達方法はどうするの？」
レミリア「ふっふっふ、伝達はカンタンよ、私の中にいる伝達こうもりを招待状にすればいいのよ。」
レミリアの中にいるこうもりは伝達と連絡に使えるこうもりがいるのだ・・・。
さて、混沌となる宴どうなるか!?

1幕・三方よいは三歩（ぽう）よ～いスタートではない

～紅魔館～

レミリア「伝達のこうもりたち、行って帰ってきなさい・・・。ちゃんと落としていくのよ・・・。」

レミリアはこうもりの足元に小さい手紙をつけて、伝書鳩のようにいっせいに飛ばす。

こうもりに理性はないんじゃないのか？って思うだろう、だがレミリアは吸血鬼でこうもりがうじゃうじゃいる、そしてそれらのこうもりはどこにいるのか、ちゃんと成すべきことを成したか？レミリアは超音波でそれらを感じ取る事ができるのだ。

咲夜「レミリアお嬢様、太陽の畑のほうには飛ばさなくてよかったんですか？」

レミリア「咲夜、よく考えて、仮に幽香のほうに飛ばしてみなさいよ・・・。

お花にはすごく神経をとがらせているフラワーマスターなのよ。もし、お花に傷が・・・汚れ（間違ってもこうもりの○とは絶対いえない）がついた原因が私だと分かったら、私は自然の怒りを受けるも同然よ。

花、見て楽しむ者、育てる事を生きがいにする者の三方よいを汚すのはいけないのよ・・・。」

咲夜「三方よい・・・？1，2，3歩（ぽう）よ～いスタートのことですか？」

レミリア「そういう意味じゃないのよ!!

どこをどう考えればそうなるのよ、まったく!!」

咲夜「レミリアお嬢様、一体どこでそういった言葉を覚えてくるんですか!?

私は仕える相手を間違ってしまったのでしょうか・・・。」

レミリア「変な受け取り方はしないで頂戴、咲夜!!

神社で宴会をしている時にね・・・霊夢に教わったのよ。」
咲夜「霊夢がですか・・・？」
レミリア「そうよ。」

三方よい、聞きなれない言葉だがこれは商いをやるに際し大切な事だ。
商いというのは儲けばかりに目線がいってしまいがちだが、儲けばかり、結果優先な行動をとっていたら足元をすくわれる。
時には刹那のひび割れが入る事になりかねない。

フラワーマスターの異名を持つ幽香が大事にしている花に取り返しのつかないことをしたら（例・太陽の畑で悪ふざけ、わざと花を粗末に扱う軽率な行動）フラワーマスターの大激怒（無数の蔦による激しいお仕置き）が飛んでくる事は目に見えて分かる事だ。
さてと本編。
レミリア「それはそうと・・・咲夜。
外の世界の衣装の準備は大丈夫かしら？」
咲夜「その辺は抜かりないありません、お嬢様。
パチュリー様も館に結界を張っているので万全です。」
レミリア「それならいいわ、咲夜。丁重なおもてなしを忘れないで頂戴ね。」
咲夜「無論です、お嬢様・・・。」

咲夜はレミリアの前から姿を消す、忠実なメイドが姿を消した後でレミリアは少しつぶやく・・・。
レミリア「咲夜は本来はこういった事を学んでいてもおかしくはないのよ・・・能力が不気味すぎて学べる機会を周辺が破壊してしまったようなものよ・・・。
パチュリーとフランに頼んで学刻（まなびきざみ）の気分を味あわせてあげたいものね・・・。」

一方こうもりたちは、レミリアの気分で選ばれた招待状をそれぞれにめがけて落としてレミリアの元に帰っていくのであった。

気まぐれなお嬢様のターゲットは・・・。

霊夢、魔理沙、早苗、さとり、こいし成り行きではアリス、チルノ、大妖精だ。

なぜ、妖夢がいないのかというと・・・ターゲットに選ばれたら主人の幽久子が紅魔館の食べ物を・・・アトランテ○スの謎の４２面のブラックホールのように食いつくしかねないからだ。

どこかの鳥雀の妖怪なら捕食者の目が変わりそうだが・・・。

次回の幕ではターゲットの反応とその様子といこう・・・。

2幕・受け取ったそれぞれの反応

～森矢神社～

早苗「今日の掃除はこれでいいですね、さてと・・・。」

早苗は神社の掃除を終えていた、この少女の名前は東風谷早苗、東に風と谷合わせて東風谷と早い苗で【こちやさなえ】、間違っても【とうふうやさなえ】ではない、豆腐屋（とうふや）を営んでいる早苗ではないのだ。

ひゅ～～～っと早苗の手元にはレミリアのこうもりが放った手紙が落ちてきた。

早苗「こうもり・・・これはレミリアさんですよね。

勝手に封を開けるわけには・・・神奈子様と諏訪子様に見てもらったほうがいいですよね・・・。

神奈子様に諏訪子様～～～!!

これを見ていただけませんか？」

神奈子「早苗、どうしたんだい？」

諏訪子「どれどれその手紙を見せて頂戴、早苗。」

神奈子と諏訪子、この二柱（二人？）は早苗の保護者同然だ、早苗を泣かせたらその怒りは止められない、蜂と鳥の吸血鬼に対する大激怒に値する、これは大げさかな。

諏訪子「どれどれ手紙の中身は・・・。」

《早苗へ》

早苗に少し息抜きをさせなさい、紅の館の宴の招待状よ。

レミリア

早苗「レミリアさんからですか、宴をやるなんて何か裏があるような・・・。」

諏訪子「早苗、紅魔館のところに行って、楽しんできたほうがいい

よ？」
早苗「楽しむなんて、そういうわけには・・・。」
神奈子「たまには肩の力を抜くことも大切だ、早苗。
今日は人里の方にいくのはやめて、紅魔館の方に行って来い!!」
早苗「でも、お二方を・・・。」
神奈子「早苗、命令だ。」
早苗「・・・わかりました。行ってきますね・・・。」
神奈子がこうでも言わないと早苗は行こうとはしなかっただろう、神様の役目は大変だ。
太陽の1日だけいない神様っているのかな、いないことを信じたい。

早苗は神社を後にする・・・。

～博麗神社～
魔理沙「霊夢～遊びに来たぜ～。」
霊夢「魔理沙、神社は遊び場じゃないのよ、戯れならよそでやって頂戴。」
魔理沙「その戯れとなるところはあるぜ、霊夢。
お前のところにもレミリアの宴の誘いがきてるのだろう、お酒もあるんだぜ。」
霊夢「来ているけど、また異変を起こすんじゃないのか？って頭から離れないのよ。」
魔理沙「霊夢、お前は頭が少し固い、今日くらいは警戒を解せ、肩の力が硬いと楽しめるものも楽しめないぜ。」
霊夢「はい、はい行くわよ、いけばいいんでしょう・・・。」
霊夢はあまり乗り気ではないが結局魔理沙と一緒に行く。
その後妖精と遭遇するのだが、これは次回の語りで・・・。

～地霊殿～
き～き～!!

こいしはこうもりが落とした手紙を見てさとりのところに向かうのであった。
こいし「これっておねえちゃんに・・・。見せたほうがいいよね。おねえちゃ～ん!!」
さとり「あら、無意識化しないで帰ってくるなんて珍しい事もあるものね、こいし、その手紙は？」
こいし「こうもりが落とした手紙だよ、レミリアさんだと思うよ？」
さとり「レミリアさんからですか・・・手紙の内容は・・・私のサードアイでもっと覗き込めれば真意はわかるのですが・・・。」
こいし「手紙の内容は何だったの、お姉ちゃん？」
さとり「こいし、今から一緒にレミリアさんのところに向かいますよ。」
こいし「フランちゃんに会えるの!!」
さとり「宴の相手とか・・・外の世界も少し気になる物がありますからね。
燐、お空ここの留守番頼みましたよ・・・。」

さとりとこいしは地霊殿を後にし、レミリアがいる館に向かう。

一方アリスは・・・。
パチュリーに借りた本を返すために、すれ違いでレミリアの宴の事は知らないでいるのであった。

真面目、常識は・・・おおっと今回の語りはこれにて。

3幕：相手は面倒・・・よし逆に利用させてもらおう

～空～

霊夢「魔理沙、レミリアのこの宴どう見る？」

魔理沙「まだ警戒しているのかよ、霊夢は。

少しは糸を緩めろよ。」

霊夢「はい、そうですかって解せると思っているの？

異変が起きたらどうするのよ？

場合によっては・・・私は出したくない手を出さざるを得ないのよ・・・。」

魔理沙「相変わらず、頭が固いな霊夢は。

少し自分に余裕を持つ術を身につけたほうがいいと私はおもうのぜ。」

霊夢「はいはい、頭が固くて悪うございましたね、白黒の魔法使いさん。」

霊夢と魔理沙は空を飛んで紅魔館に向かう途中で軽い会話を交わす。

かわすはさける、やりとりの意味がある、質問をかわす身をかわす衝撃をかわす。

身をかわした後の攻防は時としてヒートアップする、ボクシングで言うなら拳と拳のやり取り、戦っているもの同士にしかわからない空気・・・。

この幻想郷では弾幕ごっこというやりとりは定番であり、それはただ強ければいいというものではない、形も大切で彩りも大事、直線のレーザーだけでは意味がないのだ、弾幕と弾幕の間に大きい目と抜け穴をあわせて先に進んだ瞬間が最後の瞬きという事もありうる、まさに惑いの迷路。

空を飛んでいる霊夢と魔理沙を見て話しかけてくる妖精がいた、氷の妖精チルノとチルノの親友大妖精だ。

チルノ「霊夢と魔理沙、どこに行くんだ?」
大妖精「霊夢さんと魔理沙さん、こんにちは。」
霊夢「あら、チルノに大妖精じゃない。」
魔理沙「私と霊夢はこれから紅魔館のほうに用事があるんだ、私達は相手をしている時間はないんだ、分かったらそこを通してもらおうか。」

チルノは魔理沙のこの言い方がずいぶん挑戦的だなって思ってしまう。

チルノ「最強のあたいから逃げようっていうのか!?」
霊夢「どこをどう考えれば、そういう考えになるわけよ。全く頭が痛いわ・・・。」
魔理沙「少し落ち着けよ、チルノ、ずいぶんはっちゃけてるな。」
チルノ「あたいと勝負だ!!」
大妖精「チルノちゃん、霊夢さんと魔理沙さんは用事があるんだよ、足止めはいけないよ。」
霊夢「私は相手するのが面倒だから、この分野は魔理沙が向いているでしょう、魔理沙、妖精のお相手はよろしくね・・・。」
魔理沙「おい、霊夢!?」

霊夢は相手をするだけ面倒くさいと魔理沙に押し付けて先に紅魔館に行く。
魔理沙「霊夢、ひどいのぜ・・・。」
チルノ「最大の相方がいなくてどういう気分、どういう気分?」
大妖精「チルノちゃん、少し言葉を選ぼうよ・・・。
売り言葉に買い言葉って知らないのかな・・・。」

チルノを説得しようとする大妖精だがチルノは聞く耳を持たない、さてどうしたものか・・・。

チルノは青で大妖精は緑・・・ん?そういえばパチュリーは五行元素・・・。
よしいいこと思いついたのぜ。
魔理沙「チルノに大妖精、紅魔館の中じゃ混沌な遊びをやるんだ、一緒に来ないか?」
大妖精「え、いいんですか?でも・・・。」
チルノ「大ちゃん、魔理沙が言うんだから遊びも楽しい事間違いないよ。」
魔理沙「そういうことだ、一緒に行こうぜ。」
魔理沙は妖精を遊び相手に一緒に連れて行くのであった、フランの遊び相手と一緒に自分も楽しめるものがある、まさに一個の石で二羽しとめ。

~紅魔館~
霊夢は魔理沙に妖精の相手を押し付けて先に紅魔館についていた。
美鈴「・・・。」
霊夢「咲夜がナイフを持っているわよ♪」
美鈴「うひゃあああ!!・・・って霊夢さんじゃないですか。
心臓に悪いですよ、もう。」
霊夢「はいはいごめんごめん。
レミリアから宴の誘いがあるからって訪れたんだけど・・・。」
美鈴「それなら通ってください、霊夢さん。」
霊夢「それと魔理沙が後から来るけど、おまけがついているのは目をつぶって頂戴ね・・・。」
美鈴「おっしゃっている意味がわからないんですが・・・。」
霊夢「本人が来れば分かるわよ。」

霊夢は門を後にして館の中に入る、全く何を考えているのやら・・・。
霊夢「・・・あら、時止めをして咲夜が一瞬で出てくるはずなんだけど?」

小悪魔「あ、霊夢さん。ちょうどよかったです、急いできてもらえませんか？」

霊夢「え・・・？ちょっと何がどうなっているのよ!?ちょっと～？」

霊夢は小悪魔に手をつかまれて（強引に）咲夜のところに一緒に向かうのであった。

4幕：セーラー服と小さい豊穣の妖精と弾幕ごっこ（前半）

霊夢が小悪魔に腕をつかまれて状況が把握できず、強引に連れて行かれる間魔理沙はチルノと大妖精を誘って紅魔館に向かって飛ぶ。

大妖精「魔理沙さん、私とチルノちゃんも一緒で大丈夫なんですか？

紅魔館の皆さんに迷惑をかけるって考えると・・・。」

魔理沙「固いことに細かい事は言いっこなしだぜ、大妖精。」

大妖精「はあ・・・。」

チルノ「大ちゃんは心配性だなあ、あたいははっちゃけられればそれでいいんだ。」

大妖精「場所は考えてよね、チルノちゃん？」

はいはいっとチルノは軽く受け流して白黒魔法使いと妖精は紅魔館につく。

～紅魔館～

魔理沙「お～い、美鈴。おまけがついた魔理沙さんの登場なのぜ。」

ああ、おまけってこういうことですね、霊夢さん・・・。

美鈴「霊夢さんとは以心伝心なんですか、魔理沙さんは？」

魔理沙「お、美鈴、その様子じゃ霊夢は私とおまけがついてくるって言っていたようだな。チルノと大妖精のおまけつきなんだが、入れてもらえるか？」

チルノ「あたいはおまけ扱いか、魔理沙!?」

大妖精「チルノちゃん少し落ち着こうよ・・・。」

美鈴「構いませんけど、怒りを買うようなことはないようにお願いしますよ。」

魔理沙「わかったのぜ。」

～一方霊夢と子悪魔は～

霊夢「状況が把握できないんだけど、咲夜はどうしたのよ？
来客の対応にはちゃんとするのが長というものじゃないのかしら？」
小悪魔「霊夢さんのご指摘はごもっともです、咲夜さんに変わってお詫びいたします。」
霊夢「そういう対応はしなくていいから、いったいどうしたのよ？」
小悪魔「これを見ていただければお分かりいただけると思います。」
子悪魔は霊夢を連れてレミリアとフランがいる部屋の前に移動する、一体なんのこっちゃ。
小悪魔「レミリアお嬢様とフランお嬢様、失礼します。霊夢さんをお連れしました。」
霊夢「一体何がどうなっているの・・・って何よこれ・・・？」
霊夢はレミリアとフランがいる部屋に連れて行かれて子悪魔が部屋を開けた瞬間、言葉が出なかった。
レミリアとフランが着ている衣装はいつものものではない、セーラー服でレミリアのスカートはやや長くてフランのスカートは対照的にひざに届くまでのものだった、そこには机と椅子の3セットがあり椅子には咲夜が座っていた、これででられなかったわけね、霊夢は状況を理解する。
この対照的なものがパチュリーとアリスのどこでもよく見かけるちょっとした対立だがすぐに終わるのにつながるのだ、まあ、それは後の話で。（ここ最重要！）
セーラー服を着たレミリアとフランは霊夢が来たのを見て、パンパンと手を叩きアクションを重ねる。
なるほど、そういうわけね、レミリアとフランが転校生でセーラー服、おまけに能力のせいで本来あるべきはずだった学ぶものが学べなかったから咲夜に学校の気分を味あわせようと・・・面白そうだから乗っかるわよ、レミリアとフラン。
少し猿芝居も合わせてね・・・。
パチュリーには頼んでも面倒くさいから断られるのが目に見えていたんでしょうね。

霊夢「はいはい、席について席について。」
霊夢は軽い教師役、すごく楽しんでいるようだ。
霊夢「はい、転校してきた双子の姉妹を紹介するわ。
名前はレミリアさんとフランさん、仲良くしてあげてね・・・。
席は真ん中の咲夜さんの左はレミリアさんで右はフランさんよ。」
すごいノリノリですね、霊夢さんは・・・子悪魔は笑いを堪える。

霊夢の指示通り（？）にレミリアは咲夜の左にまわってフランは咲夜の右に回る、まさにサンドイッチならぬスカーレットイッチ。
レミリア「咲夜～。」
フラン「よろしく～～。」
あれれ、これってどこかで見たことがあるような・・・フ○ハウスみたいだぞ？

咲夜は真ん中の席に座っていたため、スカーレット姉妹の吸血鬼の抱擁（？）にあったかのように身動きが取れず、ぽぴ～～～かんかんかんかんかん、骨抜きにあったように、のぼせてしまう。

霊夢「これは少しやりすぎたかしら、レミリアとフランのやりたい事を私なりに考えたんだけど・・・？」
レミリア「霊夢あなた絶対楽しんでいるでしょう。」
フラン「お姉さまこの後、どうするの？
咲夜重症だよ・・・。」
小悪魔「咲夜さんは私が見ます、霊夢さんはレミリアお嬢様とフラン様の事をお願いできますか？」
霊夢「かまわないわよ、レミリア、フラン少し考えている事があるんだけど。」
レミリア「一体何を考えているの、霊夢？」
霊夢「咲夜の負担を考えて、弾幕ごっこをやっても大丈夫なところって館内には・・・ないわよね？」
レミリア「霊夢は結構考えているのね・・・。」

フラン「パチュリーのところに行こうよ、お姉さま、霊夢!!」
霊夢「レミリア、フラン・・・いや今のは忘れて・・・。」
セーラー服を着たままって言うのは言わないでおこうと思う霊夢。

～図書館～
魔理沙「パチュリー、本を返しに来たのぜ。」
パチュリー「あら、珍しい事ってあるのかしら・・・？
それはいいとして、大妖精とチルノもいるんじゃないのよ、どうしたのよ？」
魔理沙「向かう途中でつかまってしまってよ、解放してくれないんだ、だから一緒に来たというわけだ。」
パチュリー「その様子じゃ弾幕ごっこもやりたいようね。」
魔理沙「おお、さすが話がわかるぜ。
図書館の大賢者様は。」
パチュリー「おだてても何もでないわよ？」
魔理沙「かわりに面白い物を見せてやるぜ。」
６９６９??
パチュリー「一体何を？」
魔理沙「チルノ、大妖精、そこらへんに立ってくれるか？」
魔理沙はチルノと大妖精を立たせて目をつぶらせる。
魔理沙「外の世界から流れ着いた物をと・・・。」
魔理沙は仕立屋が使うように見えるはさみを取り出す。
パチュリー「魔理沙、そのはさみは？」
魔理沙「イメージしているところなんだ。」

魔理沙は目をつぶって右手に持っているはさみを第二の手であるかのようにイメージしながら、自分の魔力をこめてチルノと大妖精に向けてはさみをにぎる。
しゃき!!
魔理沙「目を開けていいぞ、チルノと大妖精。」
一体何が起きたのか？

チルノと大妖精は期間限定で、チルノは秋静葉、大妖精は秋穣子のコスプレをしていた。

大妖精「これって秋姉妹の!?」

チルノ「おお、なんかすごいじゃん。」

パチュリー「すごいはさみね・・・それにしても似合いすぎているというか・・・似合ってしまっているのかしらね、これって？

それにしてもはまりすぎているわ、あなたたち・・・。」

パチュリーは腹筋が崩壊した。

小さい○使いシュガーならぬ、小さい豊穣の妖精ここに誕生。

5幕・セーラー服と豊穣の妖精と弾幕ごっこ（後半1）

～図書館～

パチュリー「大妖精とチルノの格好、はまりすぎね。

魔理沙、そこまでやるのにすごく時間がかかったんでしょう？」

魔理沙「まあな、外から流れ着いたものを練習台にしたからな、大変だったぜ。」

パチュリー「まさかとは思うけど、アリスの人形を使ってはいないんでしょうね？」

魔理沙「使わないし、あっても使う気はないぜ。

怒らせたら怖いし、アリスなら糸で相手を刻みこんで思いのままに人形のようにすることだって可能だろ？」

パチュリー「アリスならやりかねないわね、人形に通じているだけあって。

外の世界で言えば、プレインズウォーカージェイスの能力ね。」

魔理沙「プレインズウォーカー??ジェイス???

ちんぷんかんぷんのぜ。」

魔理沙がちんぷんかんぷんになるのは無理もない。

プレインズウォーカーは強大な魔力の持ち主でその中でもジェイスは精神関係に長けている、ジェイスは相手の精神を切り刻んで相手を彫刻のようにする事も可能だ。

だがジェイスはこの能力はあまり使いたくはないのだ。

大妖精「秋姉妹の格好、なんていうかすごすぎますね、魔理沙さん。」

チルノ「この格好で秋姉妹に一泡吹かせてあげたいね～大ちゃん～～～♪」

魔理沙はチルノが悪意はないにせよ言った事に敏感する、悪意はない事はわかっている・・・。

魔理沙「チルノ、お前話し聞いていなかったのか？これは期間限定といったはずだぞ、私は。

それと本人が見ていたら大変な事になるから滅多な事は口にするな!!」
チルノ「そう怒る事ないだろ、魔理沙・・・。」
パチュリー「自覚がないから許されるって考えは捨てて改めたほうがいいわよ、チルノ。私も魔理沙と同意見よ、魔理沙はあなたのためを思っていっているのよ、チルノ?」
魔理沙「こうやって言うのはなんだが、分屋にいただきショットをされたらやばいな・・・。」
パチュリー「ツメが甘いわよ、魔理沙は・・・。
強烈なものを仕掛けてあるから心配はいらないわよ。」
それがなんなのか?物語を進ませていけば後でわかる。
そうこうはなしている間にセーラー服を着たままのレミリアとフランと一緒に霊夢は図書館に向かって歩いていた、フランははっちゃけていて情緒不安定とは思えない。
レミリアはフランと一緒にしゃらら〜〜〜んっとセーラー服を着たまま、回転してご機嫌がいいのを霊夢に見せる、お互いの翼がべしべしぺちぺち!!ってぶつかるような事はいらない心配だった。
フラン「ふっふっふ〜ん。」
レミリア「しゃらら〜〜ん。」
霊夢「すごく気分がいいわね、あなたたちは。
フランが情緒不安定がうそみたいよ。」
レミリア「あなたと魔理沙がフランを変えた、いえこの場合は変わるきっかけを作ってくれたのが正しいかもね。」
霊夢「私と魔理沙がフランが変わるきっかけを作ったなんて大げさよ、レミリア。
成り行きで勝手にそうなった、それだけよ。」
レミリア「相変わらない徹底中立ね、霊夢は、ちょっとだけどちらか(人と妖怪の意味)のほうに肩を持つという誘惑にかられることはあったんじゃないの?」
霊夢「ちょっとした誘惑にかられては、博麗の巫女は務まらないわ。
私はぬるま湯は嫌いなのよ・・・。」

レミリア「ぬるま湯？」
霊夢「物の例えよ、ぬるぬるしたものは曖昧同然よ。」
フラン「お姉さまに霊夢、早くパチュリーのとこに行こうよ。」
霊夢「ア、ごめんごめんフラン。
難しい話はこの辺で・・・。」
図書館に向かう霊夢とレミリアとフラン、そこにぶつくさぶつくさ、うち○タマ知りませんか？みたいにさとりがやってくる、さとりはセーラー服の格好をしたレミリアとフランを見て・・・。
さとり「あ、霊夢さんとレミリアさんとフランさんじゃないですか。
その格好をすると・・・なるほど、そういうわけですね。」
おなじみのサードアイでレミリアとフランの思考をよんで咲夜が骨抜きになっているのを見抜く。
霊夢「勝手に見るのはやめなさいよね、趣味が悪いわよさとり。こいしはどうしたの？」
レミリア「勝手にいなくなったの？私達は見ていないわよ。」
フラン「こいしちゃんは見ていないよ？」
さとり「どこにいったんでしょうね・・・。」
さとりが目を離した瞬間にこいしは無意識化で姿を消していた、こいしは無意識化の能力は制御できる時とできない時があってそれはさとりを困惑させる。

目を離す、これは角度を変えれば危ないものだ・・・。
さとり「それより霊夢さんたちはどちらに？もしかしたら歩いたその先にこいしがいるかもしれません。」
霊夢「とりあえずは図書館よ。」

霊夢とスカーレット姉妹とさとりが図書館に向かっている最中、図書館の中では・・・。
早苗「巫女と神官は違いますが、神に仕えるという意味ならあっている気がしますね・・・。
レミリアさんのところって何でもあるんですね、これすごく気に入

りました♪」
早苗は髪が三つ編みでめがねをつけて神官のコスプレを楽しんでいた。
モチーフはフィリアだ。
早苗「これを諏訪子様と神奈子様が見たらどういった反応するのかな、うふふふ、いいお土産話が出来そうです。」

早苗はコスプレを楽しんでいたが、その先には無意識の少女の戯れが待ち受けていようとは思いもしなかった。

こいし(無意識化で??)「外の世界でやっていたの試してみようかな?」

6幕・セーラー服と豊穣の妖精と弾幕ごっこ（後半2（コメイジこいし）

～図書館～（魔理沙とパチュリーと妖精がいるところから離れている）

早苗「巫女と神官は立場は違えど、神に仕える部分は共通していますね、えっへん!!」

早苗は神官の格好で髪型を三つ編みにしてめがねをかけて（どう見てもフ○リア）楽しんでいた。

洋風と和風は相容れない、息抜きのお菓子で言えばキャラメルと饅頭、飲み物ならお茶とコーヒー昔は派による対立が激しかったが今はそんなに激しいものではない。

和で神に仕える巫女、職業のポジションを洋風で言えば僧侶、プリーストといったところだ、刃物を使う事は戒律で禁止になっているが回復の術（すべ）を備えている。

灯火が霧散する瞬間に回復の術（じゅつ）で術（すべ）りを回避。

刃物がなければひげがぼさぼさな上に料理はどうするんだよってツッコミはあると思うが、それはいいっこなし。

こいし（無意識化で格好がメイジ）「あ、早苗がいる・・・少し反応を楽しんでみようかな？」

こいしは無意識化していて格好がローブを来て三角帽子をつけたメイジだった、メイジはメイジでも明るく示すもの（明示）でもなければ明るくして治す時代（明治時代）でもない、お菓子を作る魔術師でもない。

古くて明るい池、三文字合わせて古明池（こめいじ）だから【コメイジ】なのだ。

魔術師は大抵はソーサラー、ウィザードが多く使われるがメイジが使われる事もある大魔術師はメイガスだ、アンジェラは進み方によってはメイガスになる。

おおっと脱線失礼。

こいしは悪ふざけを考えていた、女子なのにやる事は男子なのはどうなのか、まあそういわずに・・・。
こいし「うらみはないけど悪く思わないでね、早苗。」
早苗はこいしが近くにいることに認識できず（無意識化している）・・・。
こいし「あなたの後ろにいるのはだ～～～れだ？」
こいしは小悪魔な笑みを浮かべながらあたりに鬼火がいるように演出して早苗の反応をうかがっている、鬼火はウィル・オー・ウィスプ、赤くなればボールライトニング。
早苗「え・・・？　図書館に鬼火??
紅魔館はまた異変を起こそうとしているんですか!!
これは許しがたい!!」
あれれ、どこをどう考えればそうなるんだ？
予想しない反応にこいしは逃げて逆にツッコミがあるかのように霊夢がチョップ。
霊夢「一人で勝手に盛り上がっているんじゃないわよ、これが異変のわけないでしょうが!!」
霊夢はツッコミを入れるかのように早苗の頭を右チョップ、怪獣退治は滞在時間がギリギリ3分手前で放つスペシウム光線。
早苗「霊夢さん、痛いですよ!!いつからそこにいたんですか!?」
霊夢「えっへんってあたりからよ、あんたってほんとずれているわよね、図書館の中に鬼火なんて幽霊屋敷じゃないんだから。」
レミリア「幽霊屋敷なんて紅魔館の主がいる前でよくそんなことがいえるわね、守矢の巫女。」
早苗「え～～と、レミリアさんすみません。」
フラン「お姉さま、そういう格好していても説得力が全然ないよ。」
レミリア「黙りなさい、フラン!!」
霊夢「はいはい、落ち着きましょうか、レミリアにフラン。
早苗は外の世界の神官のような格好で楽しんでいるのね・・・。」
早苗「レミリアさんとフランさんはセーラー服ですか、似合いすぎ

ていますよ、その格好咲夜さんがみたら・・・ほ・ね・ぬ・きですね♪」
霊夢「咲夜はのぼせて小悪魔が見ているわよ。」
早苗「霊夢さんはコスプレはしないんですか？」
霊夢「私はレミリアとフランの一時保護者だからね・・・。」
早苗と吸血鬼姉妹はお互いのコスプレをしているのを見て、軽くやり取り。
少し精神の目がそこにまじる。

さとり「本音はしたいけど、文に何を書かれるか、でっちあげたものをかかれてはたまったものじゃないと・・・。ふむ、霊夢さんの対応は当然ですね。」
心を読まれた霊夢は顔が少しかあああって赤くなる。
霊夢「さとり、あなたねえ～～!!
こういう時に心を読むんじゃないわよ!!」
さとり「おや、私の前では隠し事が出来ないのはご存知でしょう、霊夢さんは？」
霊夢「だからって、わざわざ言う事じゃないでしょう!!
悪趣味よ!!」
早苗「霊夢さんも女の子なんですね～♪」
霊夢「茶化すんじゃないわよ、まったく!!」
ツンデレと霊夢をあわせて【ツンデ霊夢】。
こいし「じゃじゃじゃ～～～ん!!」
さとり「あら、こいしそこにいたの・・・？
その格好は・・・魔法使いのつもり、こいし？」
こいし「うん、そうだよ、メイジだから【コメイジこいし】だよ。」
さとり「三角帽子に魔法使いにふさわしい格好・・・脱帽ものですね・・・。」
セーラー服を着た吸血鬼姉妹といい段々カオスになってきた。

7幕・セーラー服と豊穣の妖精と弾幕ごっこ（後半3（弾幕突入（前）

～図書館～

霊夢と早苗の和風巫女（ただし早苗の格好はフィリア）とセーラー服を着たスカーレット姉妹、古明池姉妹（こいしの格好はメイガス）が合流して、なんだかんだとツッコミと赤ずき・・・げっふん、げっふん、茶々を繰り返す、その一方魔理沙とパチュリーと秋姉妹の格好をしたチルノと大妖精は聞き覚えのある声を聞いて霊夢たちに近寄る。

あ～チャチャはチャチャでも赤○きんチャチャとは違うから、あしからず。

・魔理沙一行・

パチュリー「相変わらず騒がしいわね。」

魔理沙「パチュリーは静かなのが好きであって騒がしいのは嫌いなんじゃないのか？」

パチュリー「普段はね、でもレミィと妹様の戯れに付き合うのは悪くはないわ。」

魔理沙「あの～パチュリー先生。少し思いついたことがあるんですけど・・・。」

魔理沙はニヤニヤとした顔で・・・考えている事はわかるわよ、魔理沙。

パチュリー「先生って言われると調子が狂うわ、魔理沙。一体何を考えているのかしら？」

魔理沙「時間限定の秋姉妹の格好をした大妖精とチルノの格好を見せに行きたいと思っているんだけどな、私は。」

パチュリー「ようするに向こうの反応を見たいってことでしょ？いいわよ、私もその気だったし。」

大妖精「あの、魔理沙さんとパチュリーさん。」

チルノ「あたいたち、早く霊夢たちにこの格好を見せに行きたいんだけどな。」

パチュリー「はいはい、話が長くなってごめんなさい、期間限定の秋の小さい妖精さん。」
パチュリーはくすくすと笑いながら、霊夢一向に向かうのであった。

：霊夢一行：
さとり「霊夢さんも外の世界の格好のようなものをしてもいいのでは？
少しくらいの羽休めはしても何もあたりませんよ？」
霊夢「私は千鳥じゃないのよ、さとり。」
さとり「千鳥なら誰かがぐいぐい引っ張る隊長にならないといけませんね。」
霊夢「千鳥と書いてちどりよ、せんちょうじゃないわ!!」
早苗「まあまあ、霊夢さん、落ち着きましょうよ。」
霊夢「早苗、あなたね、そんな格好で言われても説得力がないわよ、まったく。」
頭が痛い、８を横にした無限みたいに感じるわ。
こいし「お姉ちゃん、悪ふざけもその辺にしないと私怒るよ？」
こいしは笑っている、だけど怒っている表情だ。
笑っているように見えて実は怒っている、そういったのは見えにくいものだ。
こいしは続ける。
こいし「お姉ちゃんの恥ずかしい話を・・・。」
さとりは大あわてでこいしの口を両手でふさぐ、この先言われた後に何があったかたまったものじゃない。
さとり「こいし、私が悪かったから、その話はやめて!!
霊夢さん、ごめんなさい、お許しを。」
霊夢「わかってくれればいいのよ。」

霊夢に謝るさとりと怒るこいしのやり取りを見ていた吸血鬼姉妹は・・・。

フラン「一体何があったのかな、お姉さま?」
レミリア「それは私達の知ることじゃないわ、そうでしょ?
猫は知りたいことを知らないと気がすまない上に知りたくなるまで後先考えない行動をとって知った後は哀れな末路を迎えるものよ。
よく覚えておきなさい、フラン。」
霊夢「好奇心は猫も殺すわ、知らないことが幸せな事ってあるのよ。」
あれれ?猫族の戦士ミリーと吸血鬼クロウヴァクスを思わせる、これって偶然かな。

そんなかんなこんなあんななやり取りをしている間に魔理沙一行が合流して魔理沙が第一声。
早苗のフィリアの格好とこいしのメイガスの格好と吸血鬼姉妹のセーラー服を見て・・・・・。
魔理沙「お～い、霊夢。
騒がしい声がしたから魔理沙さんがやってきたのぜ・・・。
早苗とこいしははまっているな、レミリアとフランは似合いすぎているぜ。」
霊夢「吸血鬼姉妹の格好を見て咲夜は骨抜きよ。」
魔理沙「容易な想像がつくぜ・・・咲夜・・・。」
霊夢「その先はストップ、ストップ魔理沙!!
言ったら抜け出せない螺旋ナイフの餌食になりかねないわよ!!」
パチュリー「霊夢と魔理沙はいつから漫才を組むようになったのよ?
その辺にして妖精たちの格好も見て頂戴。」
大妖精「霊夢さん、いかがですか?」
チルノ「魔理沙に時間限定だけど秋姉妹のおそろいをさせてもらったよ。」
大妖精とチルノは秋姉妹（大妖精は静葉でチルノは穣子）の格好を霊夢に見せてチラチラリ、季節の移ろい、それは風景の変容だ。
チルノはエプロンの下を持って食べ物の収穫があったかのように

ジェスチャーをしながら、大妖精はスカートをつまんで秋姉妹になったかのように楽しんでいる。
さとり「ふむ、チルノさんはりんごの5個か6個くらいエプロンにあるようにジェスチャーをしているわけですね・・・。豊富な収穫、これはわかりやすい。」
チルノ「そう、それだよ、あたいはそれが言いたかったんだ!!」
大妖精「ははははは・・・。」
霊夢「・・・。すごい格好ね、秋姉妹が近くにいても妖精の戯れなら本人達は目をつぶってくれるかも・・・。」
魔理沙「霊夢はコスプレはやらないのかぜ？」
霊夢「私はほんの少しの間レミリアとフランの保護者だからね、それより魔理沙、一体どうやって大妖精とチルノの格好を秋姉妹にさせたのよ？」
聞きたいか、聞きたいのなら聞かせてやるのぜわが友よ。
魔理沙「この鋏だよ、このはさみを使って衣装のイメージを浮かべながら使うんだ。一時的なものだけどな♪
霊夢もオーダーがあればできなくもないのぜ。」
霊夢「遠慮しておくわ、仕立屋のイメージってアリスならわかるけど、魔理沙には合わないと思うわ。」
魔理沙「それはひどいんだぜ、霊夢・・・。」
霊夢「ごめん、私はそのつもりはなかったんだけど・・・。」
チルノがそこに割り込むかのように、その一言がフランをはっちゃけさせる。
チルノ「せっかくだからさ、弾幕ごっこやろうよ。」
フラン「私も賛成～～!!」
大妖精「チルノちゃんちょっと待ってよ、パチュリーさんの図書館の中だよ、本に傷をつけられたらパチュリーさんが黙っていないよ？」
パチュリー「図書館の中は結界を張るから大丈夫よ、本が傷をつくことはないから安心しなさい、大妖精。」
（細かい気配りありがとね。）

チルノ「大ちゃんも弾幕やろうよ。」
大妖精「私はいいよ。」
大妖精は弾幕というものを知らないのだ、正確には弾幕を扱う技術がないというべきか。
霊夢はチルノとフランの会話を聞いていてふむ・・・弾幕ごっこか、結界の強さは限界があるからチルノはまだしも問題はフランね、力加減が出来ないため本が読めなくなったらパチュリーはどんよりする事は目に見えているわ、さてどうしたものかしらと心中考える。
さとり「霊夢さん、ここはフランさんとチルノさんのやりたいようにやらせてあげるべきなのでは？
考えすぎですよ。」
霊夢「・・・。　そうね、フランにチルノ弾幕ごっこ思い切って楽しみなさい!!
それと加減を考えてね、結界があるからって何をしようと大丈夫ってわけじゃないから。」
レミリア「大丈夫よ、霊夢。フランは力の使い方と手加減にはなれているから。」
霊夢「なら、いいんだけどね・・・。」
さとりが霊夢の考えている事を口にしたことにはあえてつっこまないでおこうと思う霊夢であった。
レミリアは魔理沙が持っているはさみを見て少し考えた事を話す。
レミリア「魔理沙、あなたの持っているそのはさみは想像した物を目の前にするもの?」
魔理沙「まあ、そうだけどな。」
レミリア「じつはね・・・(ごにょごにょごにょ)」
魔理沙はレミリアの相談を受けて顔がにやり。
魔理沙「分かった、その依頼パチュリーの本を全部引き換えで・・・。」
カッチン、がっちん。
パチュリー「魔理沙～～～???」（ごごごごごごご）
魔理沙「と言うのは冗談で喜んで引き受けるぜ。」
パチュリー「たちの悪い冗談はやめてよね、まったく。」

本気で本の角でお仕置きしてあげようかと思うパチュリー、レミリアが話したごにょごにょは何だったのか？

～その頃のアリス～

アリス「本が見つからないわね、ここにあったはずなんだけど・・・よく思い出して探しましょう。」

パチュリーから借りた本をどこに置いたのか忘れてしまい家の中でお探し中。